

CAPE ワークショップ：「〈生の意味〉論のフロンティア」

- ・ 日時：2015年3月2日（月） 14:00～18:00
- ・ 場所：京都大学文学部総合研究棟2号館第9演習室
- ・ 使用言語：日本語

・ 講演者：

呉羽真（日本学術振興会／立教大学）  
長門祐介（日本学術振興会／慶応義塾大学）  
山口尚（京都大学）  
舟木徹男（NPO 法人京都アカデメイア）

・ プログラム：

14:00～14:10 開催挨拶

14:10～15:00 呉羽真「働く人々と働くイヌたち——アニマルライフの意味について」

要旨：本発表では、人間以外の動物（以下、「動物」と表記）の生の意味について考察する。‘meaning of life’という用語が慣例的に「人生の意味」と翻訳されていることから分かるように、従来の〈生の意味〉論では、有意味な生を生きる主体が人間に限られるという見方が（明示的にであれ暗黙裡にであれ）広く受け入れられてきた。発表者は、このような議論状況に反対して、生の意味に関して採用されてきた偏狭な前提を見直し、動物の生の意味をも評価できるような枠組みを提案する。これによって、動物倫理学でこれまで十分に注目されてこなかった人間-動物の関係を巡る諸規範に光を当てることが本発表の狙いである。ここでは特に、「イヌの飼育方」という問題を取り上げて、発表者の提案する見方がこの問題への取り組みに貢献できることを示す。

15:10～16:00 長門祐介「世界の〈疎遠な〉感じと生の理解——existential feelings を巡って」

要旨：本発表で着目するのは、近年の感情の哲学において「実存感覚 existential feelings」と呼ばれる独特の心的状態が生の意味の理解にどのように関わっているかである。実存感覚を巡る議論の嚆矢となった Ratcliffe(2005)“The Feeling of Being”では、実存感覚を「世界の中に自らを発見する仕方」と説明しているが、これは具体的には心が世界を親近感／疎外感、親しみ／親しみのなさ……といった仕方を感じる場合が想定されている。この議論は感情の哲学一般にとって興味深いものだろうが、私たちの生の理解・評価にとっても重要な要素となりうるはずである。このことを示すために、実存感覚は単に私たちの生の評価モードの付随物でないと主張すること

を試みたい。その過程で私は、いわゆる「人生の物語的理解」なるものと私たちの情動の関係についても言及することになるだろう。

16:10～17:00 山口尚「人生の意味・アイロニー・自己イメージ——ネーゲルと、プリチャードをほんの少し」

要旨：本発表の目標は〈分析哲学における、人生の意味の論じられ方〉に対する批判である。私の主張は次である。私たちは人生の意味をめぐる問題を決して〈何らかの確固たる分かりやすい解答を求める理論的問題〉と見なすべきではない、と。ではそれをどう見なすべきか。さまざまな答えがあるだろうが、例えばそれを〈自己イメージの形成の問題〉と見なすのはより良い道のひとつだと思う。私たちの各々は、一定の自己イメージを抱きながら、人生を生きる。その際、世界や神に対する関係性あるいは無関係性のイメージも抱かれる。そしてこうした自己イメージのあり方が個々人の「意味」理解を形づくる。かくして人生の意味の問題はまさしく《どのような自己イメージを形成しながら生きるか》にかかわるのである。——かかる具合に抽象的に述べられたことを、Nagel 1970（および Prichard 2010）に触れながら、具体的に説明したい。

17:10～18:00 舟木徹男「『生の意味』をめぐる——ひとつの親鸞論」

要旨：本発表では、「生の意味」を差し当たり「自分の人生が何らかの価値の実現に対して果たしている寄与」と捉える。そして、「生の意味」についての思想を展開した現代の精神科医である神谷美恵子とヴィクトール・フランクルの思想を参照することで、「願望する他者」や「心の平和」との関連から、「生の意味」の成立構造を整理する。しかる後に、日本の代表的な仏教思想家である親鸞において、「生の意味」の問いに対する解答がいかなるものとなりうるか、という問題設定をおこなう。そして、上で整理した「生の意味」の成立構造から、親鸞の「現生正定聚」の思想を解釈することにより、上記の問題に対する解答を導く。